



### 中国がわかるシリーズ 40 モンゴル軍の第一次大西征 その2

ライフネット生命保険株式会社  
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

1241 年、ウゲデイが没し(チャガタイも相前後して他界)、皇后ドレゲネが国政を代行します。1242 年、既にハンガリーを席捲していたモンゴル軍は、訃報を聞いて帰途につき(第1回大旋回)、ヨーロッパは救われたのです。

しかし、グユクと仲の悪かったバトゥは、カラコルムには戻らず、1243 年頃、ヴォルガ河口のサライを首都としてジョチ・ウルス(キプチャクハーン国、～1502)を建てました。よく、ロシアは、その後 250 年間、タタールの軛に喘いだ、と云われています。

しかし、モンゴルの支配は、アカイメネス朝や、イスラーム帝国同様、極めて寛容なものでした。実際に、民衆の膏血を搾り取ったのは、アレクサンドル・ネフスキーのような(ジョチ・ウルスに服属する)ロシアの諸侯であったのです。19 世紀のロシアのナショナリズムが、タタールの軛という神話を産み出したのです。

また、バトゥの遠征に関しては、1241 年、リーグニッツ(ワールシュタット)の戦いで、ドイツ騎士団・ポーランド連合軍が、モンゴル軍に敗れたことが、これまで、必ずといってよいほど言及されてきました。しかし、最近の研究では、リーグニッツの戦いはなかったか、あったとしても偶然の小競り合い程度のものであったことがほぼ実証されています。

この戦いも、19 世紀のドイツやポーランドのナショナリズムが産み出した神話に属するもので、ヨーロッパを救ったと云われているトゥール・ポワティエの戦い(732 年)と、同工異曲の類でしょう。歴史的には殆んど意味を持たない小競り合いが、カロリング家(ヨーロッパ)の栄光や、ドイツとポーランドとの運命共同体(リーグニッツで戦死したとされるポーランドのヘンリクの遺体を、ヒトラーがベルリンに運んだことは象徴的です)のために、歴史上の大事件としてフレームアップされたのです。